

ロシア貿易構造の転換

—統計的分析による一試論—

富岡庄一

1. はじめに

従来、ロシア資本主義を論ずる場合、外国貿易を「捨象」するか、又は外国貿易を取り上げて、補論的な位置づけしか与えられないことが多かった。

しかし、ロシアのような後進資本主義国の場合、資本主義世界体制、とりわけ先進資本主義国からのインパクトを強く受け、それへの対応を示すなかで、資本主義が形成されていったのである。従って、ロシア資本主義の特質・矛盾を把握しようとする際、外国貿易は、国内的諸要因と少なくとも同等の重要性を持つものとして、配慮されねばならないであろう。外国貿易を研究対象として取り上げる所以である。

ロシアの貿易問題を研究する場合の基本文献の一つが、ポクロフスキー (В. И. Покровский) 編集の《Сборник сведений по истории и статистике внешней торговли России》, т. 1, Спб., 1902. である⁽¹⁾。

ロシアの貿易に触れる場合にしばしば典拠とされてきた文献である。筆者も、以前、ポクロフスキーの文献について自分なりの大雑把な整理を試みたことがある⁽²⁾。本稿でも、立論の主要な典拠となっている。

ところで、我が国では、ロシアの貿易問題について優れた研究を発表しているふたりの研究者がおられる。伊藤昌太氏と有馬達郎氏である。共に、前記のポクロフスキーの文献その他に依拠しつつ、伊藤昌太氏は極めて含蓄のある方法論上の提言をしておられ⁽³⁾、又有馬達郎氏はロシアの貿易構造の特質について豊富な資料に基づいた包括的な研究を発表しておられる⁽⁴⁾。本稿は、御両者の研究を常に念頭におきながら、論を進め

ることになる。

本稿での作業は、筆者にとっての目標、つまり、革命前のロシア外国貿易のありよう、及びその問題点を明らかにし、同時にそれとのかかわりの中で国内経済の発展過程を分析し、もってロシア経済の再生産過程をトータルに把握しつつ、資本主義世界体制の中でのロシア資本主義の構造的特質・矛盾を明らかにするという目標に向かっての一階梯である。

なお本稿では、農業の作況、ロシアを含めた各国の関税政策、景気変動、外国資本の動向などは一応捨象する。

注

- (1) 大蔵省関税局統計部長であったポクロフスキー編集のこの統計集は、大蔵省関税局刊行の貿易統計《Обзор внешней торговли России по европейской и азиатской границам》、Спб., 1802-1917などを基にして作成されている。(有馬達郎「19世紀末ロシアの貿易構造の特質—穀物輸出を中心として—」(『新潟大学教養部研究紀要』第12集, 1981年) 18ページ。
- (2) 研究ノート「19世紀—20世紀初めにおけるロシアの外国貿易」(『北星論集』第19号, 1981年)
本稿は、その「研究ノート」を吸収したものである。つまり、「研究ノート」に収録されている統計資料とその分析結果について、筆者なりの意味づけ、解釈を試みたのが本稿である。
- (3) 取敢えず、次の論文をあげておく。
伊藤昌太「旧露資本主義における貿易問題」(上)(中)(下)(『福大史学』5, 6, 7, 1967—8年)
- (4) 有馬達郎「19世紀末ロシアの貿易構造の特質—穀物輸出を中心として—」(『新潟大学教養部研究紀要』第12集, 1981年)

2. 外国貿易の趨勢

図. 1は、19世紀から20世紀初めにかけてのロシア貿易の動向を示したものである。これに依拠してまずロシア貿易の長期的な趨勢を明らかにしよう。

輸出貿易は、19世紀—20世紀初めを通じて、一時的な減少はあるもの

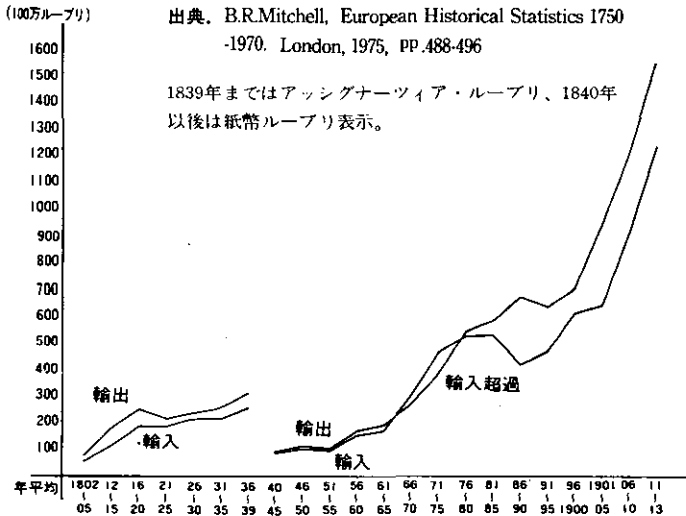
ロシア貿易構造の転換

の、全体として増加傾向にある。時期に区分してみると、19世紀初め—60年代前半は緩やかな増加、60年代後半—70年代は急激な増加、80年代—90年代はやや急な増加、1900年代—第1次大戦直前は急激な増加をそれぞれ示している。つまり、輸出が急増するのは60年代後半—70年代と1900年代—第1次大戦直前との二つの時期である。

次に、輸入貿易についてみてみよう。19世紀初め—60年代前半は緩やかな増加、60年代後半—70年代は急激な増加、80年代—1900年代前半は全体として停滞傾向（但し80年代後半から90年代前半にかけての減少は顕著）、1900年代後半—第1次大戦直前は急激な増加をそれぞれ示している。つまり、輸入の動向は、輸出の動向とほぼ一致するが、80年代後半—90年代前半の急激な減少は輸出にみられない特徴である。なお、輸入が急増するのは、60年代後半—70年代と1900年代後半—第1次大戦直前との二つの時期である。

以上をまとめれば、19世紀—20世紀初めにおけるロシア貿易の長期的趨勢の特徴としていえることは、全体としてかなり急な増加傾向にある

図1. 外国貿易の趨勢



中で、(1)60年代後半—70年代と20世紀に入ってからとの時期とにおける輸出・輸入の急激な増加、(2)80年代後半—90年代前半における輸入の急激な減少である。

貿易収支については、三つの時期に区分されよう。第1期(19世紀初め—60年代前半)は、輸出入がほぼ均衡し、やや黒字基調、第2期(60年代後半—70年代)は、大幅な赤字、第3期(80年代—第1次大戦直前)は、大幅な黒字である。

第2期の大幅赤字の原因は、輸出の減退ではなく、輸入が輸出を上回る急激な増加を示したことにある。又第3期の大幅黒字は、一つは80年代後半—90年代前半における輸入の急激な減少、もう一つは輸入の増加を上回る輸出の急増によるものである。

以上の諸点をまず確認した上で更に論を進めよう。

3. 貿易構造の転換

とりあえず、貿易品目を、ロシアで伝統的に採用されていた分類法に従って、食料品、原料・半製品、完成品など⁽¹⁾に分けたものを用いて、貿易構造の変化をみてみよう。この分類法自体に問題がないわけではないが、ここでは、貿易構造の長期的な推移を大掴みに把握するために、一応の参考資料として用いることにする。

まず、ポクロフスキーが作成した表(表. 1)によって、19世紀初頭と19世紀末との貿易構造を比べてみよう。いずれも、一次産品(食料品、原料・半製品)が大きな比重を占めているのが分かる。輸出では9割前後、輸入では7割前後が一次産品である。この点では、変化がみられない。しかし、一次産品内部では大きな変化が生じている。つまり、19世紀初頭には、輸出の中で原料・半製品が断然群を抜いていて、輸入では食料品が第1位にあったのが、19世紀末になると、輸出の過半を食料品が占め、輸入の同じく過半が原料・半製品であるという構造に変わっている。

これは、次の事を意味するであろう。ロシアの貿易構造は、19世紀初頭は、原料・半製品を輸出して食料品を輸入するものであったが、19世紀末には、食料品を輸出して原料・半製品を輸入するという構造に逆転

表.1

(%)	1802-04		1896-98	
	輸出	輸入	輸出	輸入
食料品	19.4	39.0	58.2	17.3
原料・半製品	70.1	24.0	35.5	52.7
完成品	8.4	35.2	4.0	29.4

出典 В.И.Покровский. Указ. соч., стр. X X X VI

していた。なお、完成品の輸入は、19世紀の初頭も末も輸入総額の3割前後と変りない。

ところで、このような変化は、19世紀の初頭と末に偶々生じた一時的なものであったのだろうか。伊藤昌太氏が作成した表(表.2)に依拠して、19世紀初頭から20世紀初めにかけての貿易構造の長期的傾向をみてみよう。

食料品の輸出は、19世紀の初期にはそう多くないが世紀の後半には他を圧倒する比重を占めている。食料品の輸入は、19世紀の初頭に輸入総額の約4割もあったのが、以後急速に減少傾向を示している。原料・半製品の輸出割合は、19世紀の初期には輸出全体の中で群を抜いていたのが世紀後半には半減している。そして、原料・半製品の輸入は、19世紀初頭以降世紀後半にかけて増加傾向にある。完成品の輸入が占める比率は、19世紀初頭から20世紀初めに至るまで、一時的な減少はあるものの、全体としてほぼ横這いで、多くて3割強である⁽²⁾。

これによって、先に述べた変化(逆転)は、一時的なものではなく、19世紀初頭から20世紀初めにかけての貿易構造における、長期にわたる

表.2

(%)	1802-06		1820-25		1872-76		1882-86		1896-98		1909-13	
	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入
食料品	21.4	39.0	17.2	29.9	52.0	23.8	60.0	24.0	58.2	17.2	60.5	18.1
原料・半製品	66.1	24.0	72.8	38.3	43.2	47.0	35.4	56.1	35.5	52.7	33.2	48.6
完成品	7.7	35.2	7.6	30.0	1.4	29.3	1.5	20.0	4.0	29.4	4.5	32.2

出典 伊藤昌太「旧露資本主義における貿易問題(中)」、11ページ

傾向的特徴であるとほぼ言えるのではないだろうか。但し、伊藤昌太氏の表は部分的な年次を取り上げたもので、ロシアの貿易統計それ自体を用いて逐年にわたって確認する作業がこの後必要なは言うまでもない。

しかし、一応は次のように言えるであろう。19世紀から20世紀初めにおけるロシアの貿易構造は、ほぼ一定割合の完成品輸入を伴いつつ、原料・半製品を輸出し食料品を輸入する構造から、食料品を輸出し原料・半製品を輸入する構造へ転換したと。そして、その変化における決定的な時期は19世紀の後半にあったと思われる。

そこで、有馬達郎氏の研究に依拠して、19世紀後半の貿易構造の変遷をより詳しくみてみよう(表. 3)。

表. 3

(%)	1861-65		1866-70		1871-75		1876-80	
	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入
食 料 品	34.3	32.0	40.6	21.1	49.7	22.7	56.9	22.0
原 料・半製品	54.0	39.7	48.6	44.6	43.0	45.2	35.9	48.5
完 成 品	5.8	21.1	4.7	28.0	1.8	25.5	1.2	23.6
(%)	1881-85		1886-90		1891-95		1896-1900	
	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入	輸出	輸入
食 料 品	56.9	25.4	57.7	20.7	55.6	18.7	54.4	16.4
原 料・半製品	35.8	52.3	35.2	58.4	36.1	56.4	35.9	51.6
完 成 品	1.5	16.1	1.6	14.7	2.1	18.5	2.7	24.6

出典 有馬達郎 前掲論文、15ページ

食料品の輸出割合は、60年代から70年代にかけて増加傾向にあるが、80年代以後はほぼ横這いになる。原料・半製品の輸出は、70年代まで減少傾向にあり80年代以後は輸出総額の35%前後に安定する。原料・半製品の輸入は、60年代以降増加傾向にあり80年代以後輸入の過半に達する。又、完成品の輸入は、19世紀後半全体を通して見た場合はさしたる増減はないが、60年代後半—70年代にピークを迎え、80年代—90年代前半に比重の低下が顕著である。この動向は、大幅な貿易赤字を示す60年代後

半—70年代の輸入総額の急増、及び80年代後半—90年代前半における輸入総額の急減とほぼ一致している。

以上の事柄から、次の結論を出すには無理があるだろうか。即ち、食料品を輸出し、原料・半製品（そして完成品）を輸入するという新たな貿易構造（換言すれば、食料品輸出体制）が定着したのは、1880年代であると。

そして、この食料品輸出体制の成立は、貿易収支における大幅黒字構造の形成と時を同じくしていた。

注

- (1) 1802年に始まるロシアの公式貿易報告では、品目が食料品、原料・半製品、家畜（生獣）、完成品に分類されていた。
(B. И. Покровский. Указ. соч., стрXXXVI)
- (2) このような事実については、伊藤昌太氏も指摘しておられる。
「旧露資本主義における貿易問題(中)」(『福大史学』6) 2～3ページ

4. 食料品輸出体制の成立

次に、80年代に定着すると思われる新たな貿易構造（特に、食料品輸出体制）についてより詳しい検討を加えよう。

まず、ポクロフスキーの指摘⁽¹⁾、有馬達郎氏の研究⁽²⁾、及び表 4、5 に依拠して、19世紀—20世紀初めにおける主要な貿易品目の動向をみよう。

輸出品目では、輸出総額に占める穀物の割合が19世紀初頭に比べて急上昇し、19世紀後半には群を抜く存在になっている。他に、注目すべき増加傾向を示すものは、砂糖や石油・石油製品ぐらいである。それとは反対に比率の低下が著しいのは、亜麻、羊毛、金属・金属製品（世紀初頭には、その9割以上が鉄）、動・植物性油脂などである。

次に、主要輸入品目であるが、19世紀初頭と比べて世紀後半以後に比重の増大が著しいのは、棉花、石炭、鉄、機械・器具などである。棉花は特に80年代以後の伸びが著しい。80年代は、農村家内職布業を駆逐して、織布工程の機械化が完成し、紡織捺染兼営の「完全工場」が発展す

表.4 (主要輸出品目)

(%)	1802	1861 -65	1866 -70	1871 -75	1876 -80	1881 -85	1886 -90	1891 -95	1896 -1900	1900	1910
穀物	{17.5}	33.2	39.7	48.0	54.4	53.5	51.5	48.8	46.2		{51.6}
脂用種子		8.8	9.9	8.3	7.3	5.5	5.3	4.6	4.9		
亜麻・大麻	{23.9}	14.8	15.7	15.1	13.3	13.1	10.4	11.0	8.7	{7.4}	
羊毛		9.3	4.3	3.2	3.0	2.8	2.9	1.5	1.0		
木材		3.8	4.4	6.8	5.7	5.7	5.9	6.7	7.7		
皮革・剛毛		2.8	3.4	2.4	1.4	1.8	2.2	2.1	1.8		
家畜		1.3	2.5	2.9	3.1	2.6	1.7	2.2	2.2		
砂糖	{-}	0.3	0.1	-	0.9	0.8	2.7	2.9	3.0	{3.5}	{1.8}
石油製 金属製 動物性 油脂	{-}	{0.03}	{1860}	{0.02}	{1870}	{0.02}	{1880}	{4.0}	{1890}	{6.5}	{2.1}
金属製 金属製品	{7.6}	{1.4}		{0.7}		{1.9}		{0.3}		{0.5}	{0.8}
動物性 油脂	{18.2}	{10.5}		{2.4}		{0.9}		{0.7}		{2.0}	{3.6}

出典 有馬達郎 前掲論文、23ページ

{ }内は、メンデルソン、「恐慌の理論と歴史」4、408ページ

()内は、B.И.Покровский, Указ. соч., стр. X X X VI—VII

る時期であるとされる⁽⁹⁾。鉄は60年代後半—70年代にピークを迎える。ロシア製鉄業は80年代末以降本格的な発展の緒につく。機械・器具の輸入は60年代後半—70年代に急増するが、80年代に急減した後、90年代に入って再び比重が増大し、以後輸入総額に占める割合が10数%に安定すると思われる。なお、茶は19世紀を通じてかなりの比率を維持していた。逆に、19世紀初頭と比べて比重の減少が目立つのは、繊維製品、砂糖、酒類などである。

つまり、19世紀初め以来の貿易構造では、輸出の支配的な担い手であった原料・半製品の中心は亜麻・大麻をはじめとする繊維工業用原料、動・植物性油脂の大部分、及び鉄を中心とする金属・金属製品で、一方輸入される食料品とは砂糖、酒類、茶などであり、完成品輸入の多くは繊維製品であった。それに対して、80年代に定着すると思われる新たな貿易構造において、輸出を支える食料品は、その圧倒的大部分が穀物で、

表.5 (主要輸入品目)

	1802	1861 -65	1866 -70	1871 -75	1876 -80	1881 -85	1886 -90	1891 -95	1896 -1900	1900	1910
茶	{4.1}	9.0	7.2	9.1	10.8	12.8	10.1	8.0	7.2		{5.5}
繊維製品	{34.5}	9.7	8.7	8.3	5.8	4.0	3.0	2.7	3.0		{4.5}
綿糸・ 羊毛糸		4.0	4.9	5.4	6.0	5.1	6.0	3.9	3.3		
棉花	{2.5}	11.7	13.6	10.8	10.0	15.3	20.7	16.5	11.3		
染料		5.3	4.1	3.5	3.0	3.7	3.6	3.0	2.2		
鉄	—	1.8	5.7	6.7	7.4	4.9	4.2	5.4	5.2		
石炭	{0.1}	1.8	1.5	2.2	2.8	3.1	3.2	3.0	4.0		3.2
機械・器具	—	5.8	7.5	7.5	10.6	4.9	5.4	8.5	13.4		{10.5}
砂糖	{12.2}	{4.2}	{1.0}	{0.7}	{0.1}						
酒類 (蜜を含む)	{6.3}	{5.8}	{1860}	{3.0}	{1870}	{3.2}	{1880}	{2.2}	{1890}	{2.1}	{1.5}

出典 有馬達郎 前掲論文 36ページ

{ }内は、メンデリソンの『恐慌の理論と歴史』4、407ページ

注. 1 メンデリソンの表現では、「織物」となっている。

()内は、В.И.Покровская. Указ. соч., стр. X X X V I

< >内は、伊藤昌太「独逸通商村立とロシア機械工業」

(『商学論集』(福島大学)、第39巻、第4号) 36ページ

他に砂糖が19世紀の末葉になると若干の寄与をするようになる。又、輸入で過半を占める原料・半製品では、棉花が相対的に大きな比率を示し、石炭、鉄がそれに続いている。なお、完成品の輸入では、繊維製品に代って、機械・器具の比重の増大が著しい。

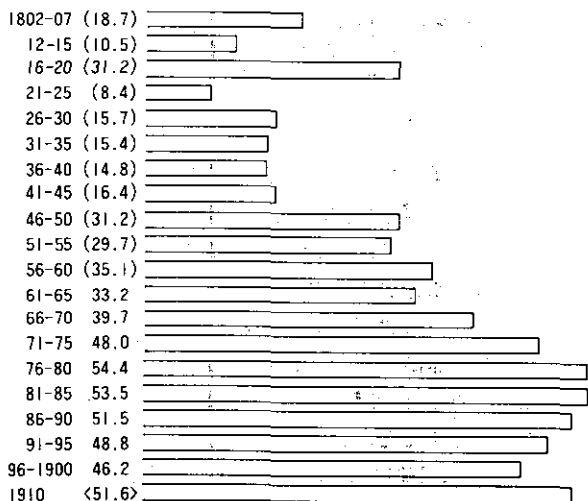
さて、80年代に成立する食料品輸出体制を支えていたのが殆ど専ら穀物輸出であったことを確認した上で、穀物の輸出について、より詳しくみてみよう(図: 2, 表. 6)。輸出総額に占める穀物の割合を基にして、輸出动向を時期に区分すると、第1期(19世紀初め—40年代前半)は穀物の割合が比較的低く、又時期によって大きく変動している。第2期(40年代後半—60年代前半)は、40年代後半に3割台に跳躍⁽⁴⁾した後ほぼ3割台に安定している。第3期(60年代後半—70年代)には比重が急上昇する。第4期(80年代以降)は穀物の占める割合が5割前後に安定、又は

やや漸減気味である⁽⁵⁾。このような動向は、輸出構造における食料品輸出の推移と一致している。つまり、穀物輸出が輸出総額の5割前後に安定することによって、食料品輸出体制の成立が実現されたのである。

穀物の種類別輸出動向をみよう。60年代前半までは、小麦がほぼ6割以上を占めていたが、上述の第3期になると、小麦の割合が急速に低下し、代ってライ麦・エン麦の比重が大きく増加した。しかし第4期は、小麦の比率が4割前後に安定し、それまで殆ど輸出されなかった大麦の比重が急上昇して第1次世界大戦直前には小麦に迫る勢いを見せている。一方、ライ麦、エン麦の割合は大戦直前に向かって減少傾向に入る。なお、時期が下るにつれて、雑穀の輸出が増えると言われる。

即ち、80年代以後穀物輸出が5割前後に安定し得たのは、従来からの重要な輸出穀物であった小麦に加えて、大麦が穀物輸出のもう一つの柱として登場して来たからであった。

図2. 輸出総額中の穀物の割合 (%)



出典 有馬達郎 前掲論文、23、51ページ

()内は、В.И.Покровский. Указ. соч., стр. 3, 14

< >内は、メンデルソフ 『恐慌の理論と歴史』4、408ページ

ロシア貿易構造の転換

表.6 (輸出における穀物の地位)

年平均	輸出総額中の穀物の割合 (%)	輸出穀物全体に占める主要穀物の割合 (%)							
		小麦		ライ麦		大麦		エン麦	
		金額比	重量比	金額比	重量比	金額比	重量比	金額比	重量比
1802-07	(18.7)								
12-15	(10.5)								
16-20	(31.2)								
21-25	(8.4)								
26-30	(15.7)		63.2		20.5		7.5		8.8
31-35	(15.4)		(但、 1820-39)		(但、 1820-39)		(但、 1820-39)		(但、 1820-39)
36-40	(14.8)								
41-45	(16.4)		70.4		20.1		3.8		5.7
46-50	(31.2)		(但、 1840-9)		(但、 1840-9)		(但、 1840-9)		(但、 1840-9)
51-55	(29.7)	(64.2)	(59.2)	(15.6)	(16.7)	(3.3)	(3.6)	(3.8)	(5.0)
56-60	(35.1)								
61-65	33.2		62.8		17.2		6.3		7.5
66-70	39.7		59.0		15.8		5.8		11.7
71-75	48.0		47.5		27.4		6.2		12.3
76-80	54.4	(47.1)	38.5	(26.1)	29.0	(5.7)	7.2	(12.4)	14.9
81-85	53.5		41.2		20.3		10.7		17.0
86-90	51.5		39.4		19.9		14.9		14.8
91-95	48.8	(45.5)	38.8	(12.1)	12.9	(15.3)	21.0	(12.1)	12.9
96-97	(47.6)	(53.4)	(43.5)	(12.6)	(15.3)	(12.8)	(17.2)	(9.4)	(11.2)
96-1900	46.2		37.6		16.8		18.3		11.0
1909-13			(40.0)		(6.2)		(35.1)		(10.3)
1910	51.6								

出典 有馬達郎 前掲論文、23、51ページ

()内は、В.И.Покровский. Указ. соч., стр.3, 14

{ }内は、農業総合研究所「世界農産物貿易統計集(第1次大戦前)」、昭和53年、

3—8ページ。但し、この比率の分母は、小麦、小麦粉、ライ麦、大麦、エン麦、トウモロコシ、米を合計したもので、全輸出穀物量はこれよりやや多くなると思われる。従って、それぞれの数字は若干割り引かねばならないであろう。

1910年は、メンデリソン『恐慌の理論と歴史』4、408ページ

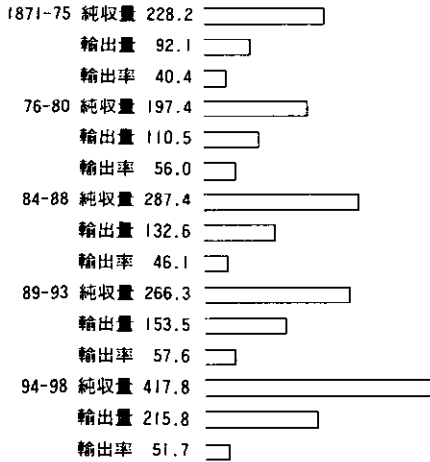
この間の事情を、主要穀物に関する収穫量、輸出量、輸出率の推移を用いて検討してみよう(図. 3)。明瞭に、二つのグループに分けられるであろう。一つは小麦と大麦のグループである。このグループの特徴は、(1)純収量の増減にもかかわらず、輸出量がほぼ一定して増加傾向にある。従って(2)極めて高い輸出率は時期による変動幅が大きい。(3)1891年の飢饉を含む89—93年の時期にも、純収量はさほど減少しないか、又は増加(大麦)さえし、輸出量も伸びている。つまりこのグループは、輸出商品としての特徴をはっきり示していて、かつ91年の飢饉の影響を、これらの数値(5年平均)に関する限り、さほど受けなかったと言えよう。

もう一つのグループはライ麦とエン麦で、その特徴は、(1)純収量の増減が輸出量のそれと大体一致している。(但し、76—80年の時期は例外で、純収量がほぼ横這いであるにもかかわらず、輸出量が増加している)。(2)輸出率は小麦・大麦のグループと比べて極めて低く、又時期による変動が(76—80年を除いて)あまりみられない。(3)89—93年の時期には、純収量、輸出量、輸出率共に落ち込んでいる。つまり、このグループの穀物は、国内での消費を主な目的として栽培されていて(ないしは、結果的にそうなった)、さほど多くない輸出量も収穫量によって強く規定されていたと言えよう。ライ麦は大衆消費食料であった。又、このグループは、91年の飢饉の影響を強く受けている。

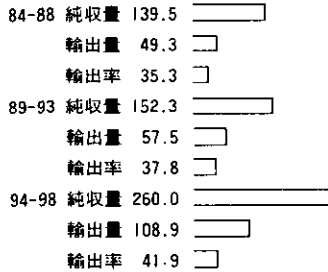
次に、有馬達郎氏の研究に依拠して、19世紀後半のロシアにおける穀物生産の地域別動向をみてみよう(図. 4)。この場合も、小麦・大麦のグループとライ麦・エン麦のグループとで、特徴の違いが看取される。つまり、小麦・大麦のグループでは、時期が下るにつれて、全体としての生産量がかなり急に増加する中で、生産地域の構成に大きな変化が生じてゆく。特に、南ステップの伸びが著しい。それに対して、ライ麦・

図3. 主要穀物の輸出率 (100万ブード、%)

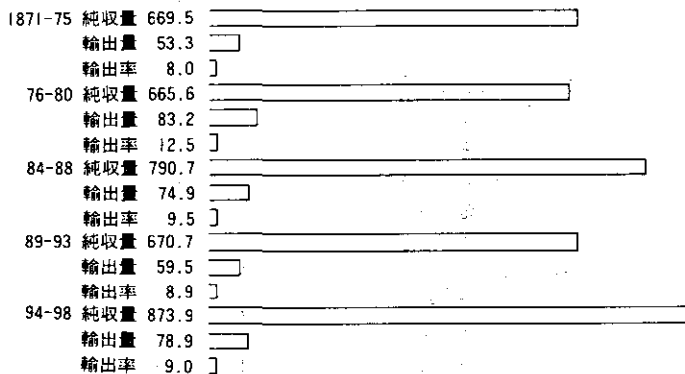
小麦



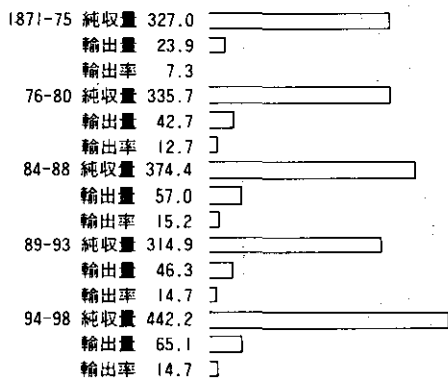
大麦



ライ麦



エン麦



出典 有馬達郎 前掲論文、53ページ

ロシア貿易構造の転換

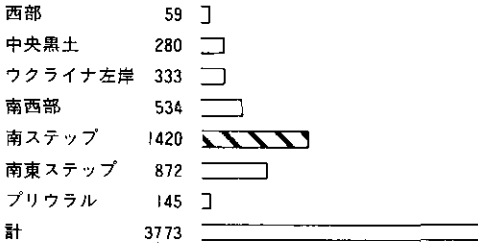
図4. 穀物の種類別・地域別生産

小麦（1万チェトヴェルチ）

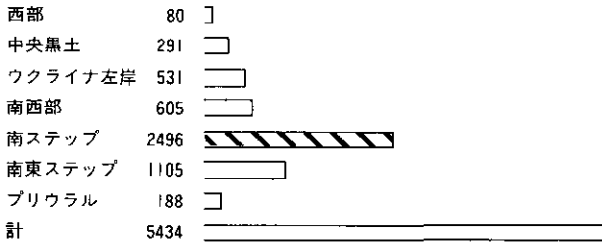
1870-76



1883-87



1893-97



大麦 (1万チェトヴェルチ)

1870-79

沿バルト	163	□
西部	?	
中央非黒土	?	
中央黒土	?	
ウクライナ左岸	?	
南西部	238	□
南ステップ	198	▨
ブリウラル	?	
計	1783	▬

1883-87

沿バルト	189	□
西部	255	□
中央非黒土	155	□
中央黒土	67	□
ウクライナ左岸	274	□
南西部	204	□
南ステップ	634	▨
ブリウラル	223	□
計	2255	▬

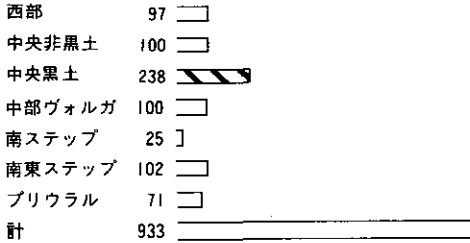
1893-97

沿バルト	236	□
西部	315	□
中央非黒土	146	□
中央黒土	141	□
ウクライナ左岸	431	□
南西部	320	□
南ステップ	1833	▨
ブリウラル	258	□
計	3950	▬

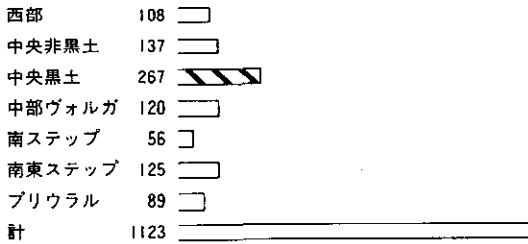
ロシア貿易構造の転換

ライ麦 (10万チェトヴェルチ)

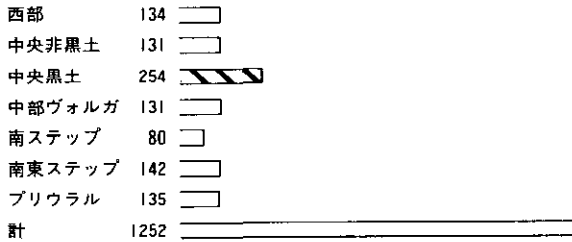
1870-76



1883-87



1893-97

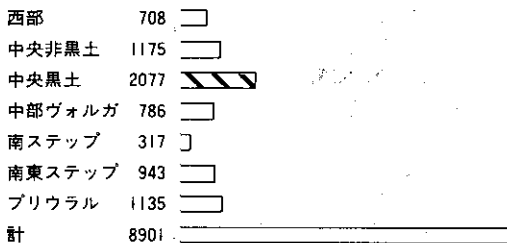


エン麦 (1万チェトヴェルチ)

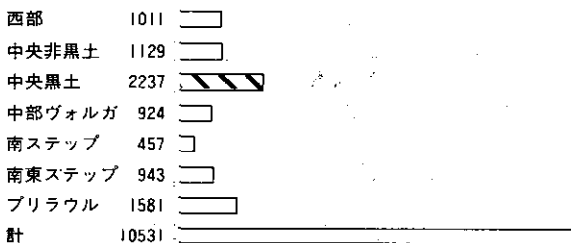
1870-76



1883-87



1893-97



出典 有馬達郎 前掲論文 74-5ページ

エン麦のグループは、生産量全体の増加がさほどでなく、中央黒土を中心とした生産地域構成にもあまり変化がみられない。こうして、穀物生産地域全体としては、中央部の地位の相対的低下と、辺境の新開穀作地域の地位の上昇（特に、南ステップでの小麦・大麦の生産増）という構成変化が生じることになる⁽⁶⁾。

レーニンも又、ロシアにおける穀物生産の主要中心地が、80年代になると、それまでの中央黒土地帯から、南部ステップ地帯とヴォルガ下流の諸県（ヘルソン、ベッサラビア、タヴリーダ、ドン、エカテリスラフ、サラトフ、サマラ、オレンブルク）に移ってゆくことを指摘している。農奴解放後、南部ステップの辺境は、人口稠密な中央部の植民地になり、市場目当ての大規模な農業生産が開始される。自由で豊富な土地を求めて、多くの移住者が、開拓農民として入っていった。経営当りの作付面積は、サマラ県で8000—15000デシャチーナ、タヴリーダ県では、大きいものでは20万デシャチーナにも達した。そして、或る経営では、1100台の農機具が用いられ、又、ヘルソン県では1890年の経営当りの平均労働者数が67人（内16—30人は、年雇）であった。つまり、資本主義的大農場が展開し始めたのである⁽⁷⁾。

以上の分析から言えることは、まず穀物の輸出構造については、19世紀半ばまでは小麦のみが他に抜きん出るといふ不均衡な構造であったのが、80年代以降、小麦と大麦の二本柱に支えられるというより安定した構造に次第に変っていったということである。つまり、80年代以降のロシア貿易における食料品輸出体制の確立を促したのは、主として輸出を目的として栽培された小麦と大麦という二本柱に支えられた穀物輸出であった。

一方、60年代後半—70年代における穀物輸出の急増は、ライ麦とエン麦の輸出増によるところ大であった。しかも、この時期（特に、70年代後半）にはこれらの穀物の輸出率が急上昇している。小麦の輸出量も決して減少しているわけではないが、全輸出穀物量に占める小麦の割合が急速に低下している事からも、ライ麦・エン麦の輸出の増加が如何に著しいものであったかが分るであろう。この時期の穀物輸出の相対的かつ絶対的急増は、鉄道建設を楨杆とした急速な工業化に伴う生産財（鉄や機械・器具）の洪水的輸入を原因とする貿易収支の構造的赤字を少して

も軽減しようとする必死の努力の現れであった。つまり、従来からの輸出穀物の小麦だけでは足りずに、本来は国内消費にあてられるべき大量のライ麦・エン麦が輸出に振り向けられたのである。「十分に食べてしまわずに輸出しよう」というスローガンに代表されるロシア穀物の「飢餓輸出」の特徴は、この時期には文字どおりあてはまるのではないだろうか。

又、ロシア穀物輸出の中心となる小麦・大麦の主要栽培地域は、中央黒土地帯ではなく辺境の新開地域であった。そこは、雇役制が広く行われていた所でなく、資本主義的大農場経営の土地であったといわれる。そうだとすると、穀物輸出のメカニズムを、農民に対する農奴遺制的な支配を基盤にした「飢餓輸出」と、ストレートに説明するのには無理があるのではないだろうか。辺境における資本主義的農業のありようを明らかにし、それに基づいて、穀物輸出のメカニズムを解明する必要がある。

穀物を主役とする食料品輸出体制を脇から支えるべく、19世紀末葉に登場してくるのが砂糖である。砂糖は、19世紀前半には殆ど輸入されていた(表、7)。砂糖は主要な輸入品の一つであった。しかし、70年代後半(特に、80年代後半)以後、輸出が急増し、上位に位置しないまでも。主要輸出品の一つになる。ロシアにおける製糖業の発達は、砂糖の大量輸入を防いで輸入額の削減に役立っただけでなく、輸出産業として80年代後半以後砂糖輸出を急激に増やすことによって、食料品輸出体制の確立に寄与したと言えるであろう。

結局、輸出構造については、次のように言えるであろう。80年代以降、小麦と大麦とを二本柱とする穀物輸出を中核とし、更に砂糖輸出を加えて、食料品輸出体制が成立する。又、その体制を後押ししたのが、石油・石油製品などの輸出であった。ところで、このような食料品輸出体制がまだ整っていない60年代後半—70年代には、機械・器具や鉄を中心とした輸入の急増が、ロシアの貿易収支を大幅な赤字に落とし入れることになった。しかし、食料品輸出体制が成立する80年代以降は、原料・半製品や完成品の輸入増にもかかわらず、貿易収支が大幅赤字を出すことはもはやない。貿易収支の大幅黒字構造が定着していたのである。

ロシア貿易構造の転換

表.7 (砂糖の生産・論出入)

	生 産 (100万ブード)	輸入総額に 占める割合	輸出総額に 占める割合
1802—05		13.4	
12—15		19.7	
16—20		17.6	
21—25		16.8	
26—30		16.3	
31—35		12.0	
36—40		12.5 ²	
41—45		10.0 ³	
46—50		11.1	
51—55	0.7	7.4	
56—60	0.9	4.7	
61—65	1.5	4.2	0.3
66—70	4.3	1.0	0.1
71—75	5.3	0.7	—
76—80	11.3	0.1	0.9
81—85	17.1		0.8
86—90	26.6		2.7
91—95	30.2		2.9
96—1900	39.3 ¹		3.0

出典 有馬達郎 前掲論文、23、36ページ

В.И.Покровский. Указ.соч.,стр.92,93

メンデリソン 前掲書、428—432、440ページ

注.1 1896—98年の平均

注.1 1836—39年の平均

注.3 1840—45年の平均

注

- (1) В. И. Поировский. Указ. соч., стр. XXXVI-XXXVII
- (2) 有馬達郎 前掲論文, 22-44ページ
- (3) 和田春樹 「近代ロシア社会の発展構造(1)」(『社会科学研究』 17巻, 2号) 140-41ページ
- (4) 1840年代後半の穀物輸出の急増は、イギリスが穀物法を廃止したことによる、国際農産物市況の好転によるところが大であると思われる。詳しくは、伊藤昌太 前掲論文(下), 8~9ページを参照。
- (5) ポクロフスキーは、19世紀ロシアの穀物輸出動向を、輸出の伸び率を基準にして、第1期(19世紀初頭-40年代前半)、第2期(40年代後半-70年代)、第3期(80年代以降)の三つに区分している(В. И. Покрвский. Указ. соч., стр. 2-3)。しかし、第2期は60年代を境にして明らかに傾向の変化が見られる。四つの時期に区分した理由である。
- (6) 有馬達郎 前掲論文, 73ページ
- (7) レーニン 『ロシアにおける資本主義の発達』(『レーニン全集』第3巻) 253-6ページ

5. おわりに

ロシアは、クリミア戦争以後、急速な工業化を至上命令とされていた。つまり、世界貿易における自由貿易体制が成立していた60年代後半-70年代に、フランス、ドイツに一段階遅れて、鉄道建設を基軸とした工業化を推進せねばならなかつた。

その工業化プランは、鉄道建設及び鉄道用材(機関車、車両、レール)製造業に対する国家の強力な財政援助と、比較的自由主義的な関税政策の下での生産財(特に鉄と機械・器具)輸入とに支えられていた。

そのような工業化の結果は、鉄道網の拡大と鉄道用材製造業の成立をみたものの、鉄網・機械などの輸入急増による貿易収支の赤字構造への転落と国家財政の悪化であった。

かくして、60年代後半-70年代のロシア工業化プランは破綻する。そこで、ロシアは新たな対応を迫られることになる。即ち、ロシア資本主義の最大の課題は、貿易収支の大幅黒字を維持しつつ、急速な工業化を行うことにあった。

時あたかも、1870年以後世界貿易の構造変化が起っていた。つまり、

(1)ヨーロッパにおける工業化の進展が一次産品生産諸国からの輸入の増大をもたらし、(2)ドイツが、ヨーロッパにおけるイギリスの伝統的市場を奪ってゆき(特に、ドイツの機械がイギリス製を駆逐し、イギリスは代りに石炭の輸出を強めつつあった)、(3)ヨーロッパの国々では保護貿易主義が復帰していった。そして、このような変化の中から、世界的な多角的貿易網が形成されていったのである⁽¹⁾。

工業化を推進するための前提諸条件(資金、技術、人材、生産手段)を国内に決定的に欠きつつも、工業化を強制されていたロシアは、否が応でも、そのような世界貿易の変化に対応せざるを得なかった。

60年代後半—70年代の貿易収支の構造的赤字の原因の一つは、輸入の急増に輸出が追いつけなかったことである。工業化の進行に伴う輸入の増加を補って余りある十分な、そして安定した輸出を確保する必要があった。鉄や亜麻・大麻といったロシアの伝統的な輸出品(原料・半製品)は、ヨーロッパにおける綿工業、近代的製鉄業の発達によって、輸出市場を急速に失っていった。そこでロシアは、従来のような原料・半製品輸出を中軸とし、加えてもっぱら小麦に依存した穀物輸出という輸出構造を転換して、小麦に大麦を加えてより安定した穀物輸出を支柱とし、砂糖輸出によって補助的に支えられた食料品輸出体制を確立し、さらに、新たな輸出品として、石油・石油製品などの輸出増進に努めることになった。工業化を推し進めるためにはそうせざるを得なかったのである。そのような要請に応える任務を負わされたのが、辺境での商業的大農業による小麦と大麦との栽培、キエフを中心とした南西部での地主貴族所有の甜菜プランテーション・製糖工場、バクーでの外国資本に依存した石油業などである。

60年代後半—70年代の貿易収支の構造的赤字のもう一つの原因は、機械や鉄鋼の輸入急増であった。それへの対応は、それらの製品の国産化を出来るだけ進めることである。80年代における、外資導入を楨杆とした南部ロシア鉄鋼業の本格的発展の開始、及び一般機械器具製造業の生成とがその要請に取敢えず応えるものであった。こうして、鉄鋼と、比較的製造の簡単な「一般機械器具」(ボイラー、蒸気機関、農機具、製糖・製粉・醸造用の機器、機械部品、ポンプ、タンク、伝導装置)は、かなりの部分が自給可能となってゆく⁽²⁾。但し、工作機械、繊維機械、高級複

雑な農業機械の供給は依然として輸入に依存し続ける。機械の輸入は、次第にイギリスからドイツに比重を移し、代りにイギリスからは石炭の輸入が増える。こうしてロシアの輸入構造は、棉花（主として、合衆国から）や石炭をはじめとした原料・半製品輸入が中軸となり、加えて高級複雑な機械の輸入が一定の割合を占めるという構造に変わってゆく。

その結果、80年代以後のロシアの工業化プランは次のようなものにならざるを得なかった。貿易収支の黒字構造を維持しつつ工業化を促進するという目標を実現すべく、保護貿易政策の下で、外国資本を導入して、まずは鉄鋼業、一部の機械工業、製糖業、石油業を発達させ、次に石炭業、機械工業全体の発達をはかる。なお、80年代に既に確立していた機械製棉工業は、繊維製品輸入の削減には寄与したものの、原料である棉花の相当部分を輸入せざるを得ず、又製品の販路は殆ど国内市場に求めざるを得なかった。つまり、棉工業の発達は、貿易収支の黒字化に積極的に貢献せず、逆に赤字を増やすものであったので、工業化プランの枠外に置かれた。即ち、国家の工業育成策の直接の対象とならなかったのである。

さて、以上のようなロシアの対応は、ロシア経済が世界的規模の多角的貿易網に、そして国際分業体制に深く組み込まれることを意味した。換言すれば、ロシアは、資本主義世界体制の一環として、新たに位置づけられたのである。その位置とは、先進工業諸国には一次産品を輸出して完成品（工業製品）を輸入し、そしてロシアよりも経済的に遅れた国には完成品（工業製品）を輸出しつつ、国内の工業化を計るという、後進資本主義国としてであった。そして、ロシアで工業化が進めば進む程、その位置づけはより深く固定化されることになる。それは、同時に、矛盾が蓄積されてゆくことを意味した。

つまり、前述の如く、ロシアは80年代以後食料品輸出体制の創出に一応成功し、その結果貿易収支の大幅黒字を確保する。但し、その背景には次のような問題点が存在していた。即ち、輸出される穀物の中でも、穀粉は国際競争力を持たず、殆どが穀粒のまま輸出された。その穀粒も合衆国などとの苦しい競争にさらされていた。国際価格を下回る低価格での輸出（農民経済を犠牲にした低労働報酬体系がそれを支えていた）によってようやく対抗し得たのである。そして、穀物の輸出入取引を掌握

していたのは、外資系の巨大商社で、海運や保険は外資の圧倒的な支配下にあった等々⁽³⁾。又、砂糖の生産は、ロシア特有の低賃金労働(低労働報酬体系)に依拠し、その輸出は高関税率と独占形成を背景としたダンピング輸出であった⁽⁴⁾。更に、先進国へは粗糖が輸出され、精糖は後進国にしか輸出されないという弱点をはらんでいた⁽⁵⁾。

しかも、このような問題点を含みつつ獲得された貿易黒字は、貿易外収支の赤字の補填に当てられねばならなかった。その主なものは、フランスをはじめとする資本輸出国に対する利子・配当の支払、及び主としてイギリスに対する海運費・保険料の支払などである。これらの支払は、時とともに益々増加する傾向にあった。特に、資本の輸入は、ロシアの工業化を推進する上で不可欠の要素であった⁽⁶⁾。

これらの諸問題、諸困難を克服しつつ、一層の工業化を果すことが出来るかどうか、ロシアにとっての新たな課題であった。

- 注(1) S. B. ソウル(久保田英夫訳)『イギリス海外貿易の研究』(文真堂、昭和55年)23, 25, 86ページ
- (2) 拙稿「19世紀後半におけるロシア鉄工業の発達」(『土地制度史学』第76号)を参照。
- (3) 有馬達郎 前掲論文, 52, 54-8ページ
- (4) 和田春樹 前掲論文(2), 171-2ページ
日南田静真『ロシア農政史研究』(御茶の水書房 1966年), 330-4ページ
- (5) 有馬達郎 前掲論文, 33ページ
- (6) ロシアへの外資の流入額については、差当りII. B. O.II.の直接投資に関する計算値をあげておく。なお、参考までに、同時期の貿易収支の黒字額を付加しておく。

株式企業への外資の直接投資額			貿易収支の年平均黒字額
	累積	年平均増加分	
1880	92.0		
1885	147.3	11.1(1881-85)	54.6(1881-85)
1890	186.2	7.8(86-90)	255.2(86-90)
1895	244.0	11.6(91-95)	167.6(91-95)
1900	761.9	103.6(96-1900)	90.2(96-1900)
1905	849.6	17.6(1901-05)	309.2(1901-05)
1910	1125.6	55.2(06-10)	293.8(06-10)
1913	1700.6	115.0(11-13)	307.3(11-13)

(単位は、全て100万ルーブリ)

加えて、国外で保有されるロシアの国債・政府保証鉄道会社債の累積額が、1900年で38億7730万ルーブリ、1914年で61億4930万ルーブリあったと推計される(B. И. Бовыкин. К вопросу о роли иностранного капитала в России. 《Вестник Московского Университета》 No. 1, 1964, стр. 65)